

ネット 新世紀 ヨーロッパ

vol.2 Internet New Century Europe

ひっそり インターネット文化国

スロベニア
Slovenia

岡田 智博

Tomohiro Okada

coolstates.com

滞在中の休日、マルコの友人の文化庁のお役人さんのお家でディナーをごちそうになりました。リュブリアナから高速で45分のまるで我が郷土、安曇野を思い出す透き通る河畔の森の中の家で、手作りのパンと巨大なホウボウのグリルをいただきました。「山で生まれたから、街には住めないんだ。だから、毎日ここから自動車通勤さ」とのこと。ウラヤマシイ。

東欧の豊かな国「スロベニア」

「アクティブなインターネットのユーザーは2割程度」と人々は口にして、過少にインターネットの普及率を見積もろうとする。普通だったら自国の進み具合や市場の大きさを語るためになるべく大きめに見積もろうとするのに、なんて謙虚なのだろうと思ってしまう。そんな不思議な国がスロベニアだ。

かつてユーゴスラビア連邦の一員をなし、もっとも西側に近かった東欧の国。大きさは四国ほどで、全人口はおよそ200万人、首都リュブリアナの人口は30万人とヨーロッパの中でも小さい部類に入る。その小ささと東欧で唯一、1人あたりのGNPが1万ドルを越える潜在的な豊かさを背景に、すでに90年代半ばには、小学生から大学生まですべての学生にインターネット接続のアカウントが提供されていたとてつもない国なのだ。

全学生にインターネットを！

「実際、あらゆる学生にインターネットのアカウントを無料で配布して、家からダイヤルアップの接続ができるようにしても、それを四六時中すべての子供や親が使っているわけではないでしょう」と語るのは、全学生にアカウントを提供した張本人のマルコ・ボナク氏。彼はスロベニア学術調査ネットワーク（ARNES）のディレクターを務める。

「だいたい学校にはコンピュータはあるが、家庭にはまだまだ少ないし、うちの子供だってコンピュータよりも外で遊ぶのに夢中だ」とボナク氏は話を続ける。

実はかつてのユーゴ連邦では1970年代からコンピュータリテラシーの教育が盛んに行われていた。このため小学校を含むすべての教育機関にインターネットを提

供するのは自然な考えだった。

1993年にはすでにすべての教育機関にインターネットを提供できる準備は整っていた。問題は小学校や中学校という末端の教育機関に、モデムやコンピュータの端末を行き渡らせるだけの予算が十分になかったことだった。

それはリュドミラから始まった

その話を聞きつけ、潤沢な資金で支援を申し出た存在があった。国際投資家として名を馳せていたハンガリー出身のジョージ・ソロスが、私財を投じて活動させていた「開かれた社会財団」のスロベニアでのワークメンバーたちである。

ただちに彼らは教育機関のインターネット普及に向けて、機材や資金を提供して支援した。それだけでなく、地域密着型のメディアアートを創造するために組織化し始めたメディアアーティストたちとのマッチングも行った。こういった動きから新たな普及が始まったのだった。

インターネット接続の受け入れ先として「リュドミラ」という名のメディアセンターが、開かれた社会財団の手で設立された。そこで真っ先に行われたのは、旧ユーゴ連邦各地を接続するパソコン通信ネットワーク「ザミール」に対するインターネット接続の提供だった。紛争下にあった当時は連邦各地の人々の情報交流が遮断されていたため、それを打破するのが目的だった。と同時に、首都リュブリアナの繁華街に無料のインターネットカフェをオープンし、ネットアートの展覧会やクラブイベントを開催したという。

あたらしい政策が動き出す

ところが、世界の動きとはうらはらに、いまやスロベニアではインターネットの普

及の伸びそのものが頼打ちというのだ。それが「アクティブなインターネットユーザー」という言葉にはね返っている。

「学校を卒業したらアカウントは失効する。無料はここまで。もちろん家で使っているダイヤルアップのアカウントも」(ボナク氏)。普及の内実は教育や文化として、インターネットが必要だと尽力してきた人々の努力の賜物だったのだ。

「回線を増強しようにもテレコムスロベニア(以下、テレコム)の回線使用料が高く払い切れない。テレコムは回線の品質も高く、光通信網を全国に行き渡らせているのに、情報通信社会に向けた活用基盤の整備よりも利益の確保しかこの国の商工族は考えてこなかった」と同氏。

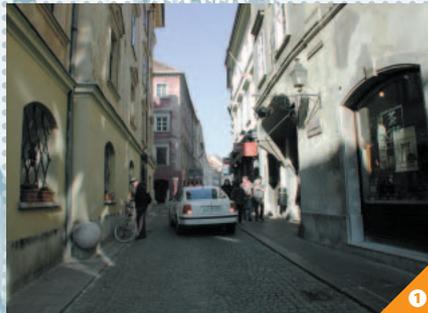
この不満は今回出会ったベンチャー企業家だけでなく政府官僚を含む多くの人々から聞いた。既得権益で金を稼ぐという既存の産業経済側の論理がこの国の本格的なインターネット普及のチャンスを妨げてしまったのだ。

しかし、情報通信社会への世界的な変化が流れを変えつつある。すでにテレコムは民有化され、通信料の引き下げや新規通信事業者の参入機会の提供が現政府によって議論されている。情報通信社会実現のための新省庁、情報社会庁も今年発足して仕切り直しをしている最中だ。

初期のインターネットの普及は決して無駄なものではなかった。普及に尽力し、またそこで触発された人々が、構造改革のための政府アドバイザーとなり、ベンチャー企業を立ち上げる新世代の担い手となったのだから。

ソースはスロベニア政府機関発表資料で、調査項目はいつもインターネットを使っている人とまったく使っていない人という至極正直な取り方によるもの

 www.ris.org/sorosx.doc



①② 首都リュブリアナの風景
 ③ 「だれもがインターネットを使えるようにしたかった。そのために、自由にインターネットを使える環境を提供してもらいたかった。」とマッチングの際に活躍したメディアアーティストのマルコ・ベリハン氏。現在、ベリハン氏は地方各地で若者にインターネット技術と表現の講習を行う移動メディアセンター「モバイルラボ」づくりに尽力している。
 ④ ベリハン氏とともにリュドミラを立ち上げたヴック・コシツク氏は、現在、リュドミラを離れ、インターネットを舞台にしたアート活動で蓄積したノウハウをもとに、SIPSカンパニー「リテラル」を立ち上げている。そこでクリエイティブディレクターを務める一方、今年のベネチアビエンナーレに向けてプロジェクトを準備中。
 ⑤ 英国を中心にEU各地のベンチャーキャピタルから金を集めて勢い盛んなもう一つの大手SIPSカンパニー「パルセック」は官庁街のど真ん中にある。アートディレクターのオズラン・スコンディック氏は世界各地のFLASHデザインイベントに招待されるほどの洗練されたインタラクティブデザインを強みに持つ。まずはミラノ進出を準備中だ。

参考 URL

- | | |
|-----------|--|
| ARNES |  www.arnes.org |
| テレコムスロベニア |  www.telekom.si |
| リュドミラ |  www.ljudmila.org |
| マルコ・ベリハン |  makrolab.ljudmila.org |
| リテラル |  www.literal.si |
| パルセック |  www.parsek.net |



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp